

# 葡萄の香



日本基督教団  
酒田教会

〒998-0037  
酒田市日吉町  
1-1-7  
Tel 0234-22-1224  
牧師 塚本恭子

## わたしはまことのぶどうの木

牧師 塚本恭子

わたしはまことの葡萄の木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。

ヨハネ福音書 15章5節

主イエスが十字架に架かる前に弟子たちに残された御言葉「わたしはまことの葡萄の木」。そして今、私たちの教会にキリストの霊が生きて働いていることを示している言葉です。キリストが教会の頭で、教会はキリストの体であり、すべてがキリストの霊の働きにある共同体が教会です。だから、私たちにキリストの霊が宿り、一人ひとりの信仰が深められて常に成長するのが教会です。教会が信仰の実を結ぶことを葡萄の

木に譬えて勧告しています。

私は、この教会の牧師として招聘されることになった時から、教会機関紙を発行することを考えていたが、酒田教会がキリストである葡萄の木に繋がって、豊かに実を結び、その実が芳しく香ることを祈って「葡萄の香」と名付けました。

かつて、イスラエルは乾燥した暖かい気候で葡萄栽培するには最適でした。美味しい葡萄が収穫されてその実はぶどう酒をつくるのに使われていました。今でも岩盤に掘り込まれた酒ぶねが残っています。当時、収穫された葡萄の実が摘み取られてこの酒ぶねに集められ、人間の素足で踏み潰され、絞られ、皮袋に入れて発酵して葡萄酒は造られていました。

人々は良い葡萄の実を実らせるために、実のついていない枝を剪定し、実をつけた少数の枝に栄養を集中させて美味しい大きな実をならせることをしていました。水や肥料を余分なものに与えないために、繁っ

ているだけの枝は剪定する必要があったのです。剪定された枝は細く曲がっていて、その上、弱く折れやすいので何にも利用することができなかつたので、集められて火で焼かれていました。だから、ユダヤ教の律法には葡萄の枝は神殿の薪に捧げることが禁止されていたこともあって、役に立たないものの譬えに使われていたのです。ここでも葉が繁っていて、実をならせない葡萄の枝、それは枝が切り取られ枯れてしまうことから神の裁きの譬えとされていたのです。

切り取られる枝は、誰であるのか。一つにはユダヤ人のことです。彼らは神から選ばれた民であると自覚しているのに神の子を受け入れなかつたし、神の言葉を語る主イエスの教えを聞こうとしなかつたのです。それゆえにイスラエルの民は、偽りの葡萄の木であると。もう一つは、今、群衆が主イエスの教えを聞いて、主イエスに従ってはいるが、その行いや実践が伴わないで、口先だけの信仰をもっている。その人たちは、自分中心で都合が悪くなるとすぐに信仰を捨て、主イエスを裏切り背信行為をする人々である。主イエスの弟子であるイスカリオテのユダがそうであったように、自分の欲望のために主イエスを捨てる人は

実を結ぶことができない。その枝は刈り取られ破滅すると裁きが言われています。

葡萄の木を剪定したり、養分を与えたりするのは農夫であります。その農夫は主イエスが「わたしの父」と呼ぶ「神」のこと。

その神は私たちを剪定するのです。キリストに繋がっていながら、実を結ばない者を神は剪定されて捨てられる。その木に繋がって実を結ぶものは、神が手入れをして下さるので、その枝は豊に実を結ぶ。私たちがキリストにあることは、実を結ぶためのものである。そして信仰は実を結ぶために成長するものであります。この裁きは、いつも私たちに突きつけられています。あなたはキリストに繋がっていて、キリストにより命が与えられていますか。これは、私たちの意志、決断、信仰告白によるもので、神に問われているその問いに応答することが、つながれて永遠の命が与えられ、豊かに実るのです。

主イエスは「わたしの言葉によってあなたがたは既に清くなっている」と言う。神の言葉は、聖霊の働きで私たちを清める力をもっている。私たちは主イエスの言葉と聖霊により慰められ、清められ、救われるのです。枝が「切り取られる」と「清くされる」が二者択一的な対比をなしています。

信仰の実が大きい実かどうかは、私たちの目に見えません。その実は主イエスご自身が実を結ばれるので、私たちは安心して主イエスに従い、自分のすべてを委ねればいいのです。

この葡萄の木に繋がっていることは、神の力と神の支配が教会に働いているので、私たちは神の前にひれ伏し、キリストの霊を受け、み言葉に生きることあります。

このキリストに繋がるとは、キリストの十字架を信じ、復活の主と交わり、新しい光の中で生きることです。キリストこそ、まことの葡萄の木で、私たちがキリストに繋がっていると、葡萄の根から葡萄の枝が伸びるように、キリストから「永遠の命」を得ることができ、生きた命の水を与えられて人生を豊に歩むことができます。

私たちはそれぞれの信仰に基づいて、それぞれに相応しい実を教会で結ぶのです。

キリストに繋がっていない人は、この世の中で葉だけを繁る虚無の世界、救いが無い世界に生きなければならぬ。その世界は火で焼かれるサタンの支配する世界で生きていることとなります。私たちがこの地上で主イエスの言葉を信じ、教会に働く主イエスに従うならば、私たちは絶望の世界ではなく、永遠の命と繋がって、泉のように

湧き出る聖霊に満たされて、魂の慰めが与えられます。たとえ、現実には苦しく困難でも、キリストの霊に満たされて希望に生きることが出来るのです。その時教会はキリストの実を豊かに結んでいるのです。

(主日礼拝説教要約)

## 塚本牧師の就任を祝して

宮城学院理事・前宗教総主事

元仙台川平教会牧師

大沼隆

私は今、海外旅行中です。プラハ、ブタペスト、ウィーンなど、オペラ鑑賞のツアーに参加しています。塚本牧師の就任式に出席できないのが残念ですが、私が塚本先生を一番よく知っていると幸いですので紹介します。

塚本恭子牧師が私たちの前にその姿を見せたのは1971年の春。かれこれ四十年を超える昔です。数学専攻のクリスチャン教師を学校が求めていた頃でした。岩手大学の学生時代、既に矢内原忠雄主宰の聖書研究会に参加して、その影響を受け、盛岡の館坂橋教会で受洗し、ご結婚後札幌でもキリスト教学校に奉職された経歴を持って

おられました。

仙台外記丁教会（現・仙台川平教会）に転籍された当初から高齢者の多かった婦人会員や熱気溢れる大学生や高校生たちとたちまち「溶け合うように」交わりを深め、教会活動の中心的な役割を担い、役員として毎週の主日礼拝や木曜日夜の聖書研究会・祈祷会も欠かさず出席され、様々な奉仕をされました。ガリ版の週報造り、会堂清掃、機関紙の編集や発送、青年たちとの活発な議論、修養会の企画実施、クリスマスなどの季節になるとポスター造りやチラシ配布などなど・・・そのエネルギーな奉仕ぶりは多くの教会員の記憶にも鮮やかに残っています。

1984年に教会は郊外の住宅団地（現在の川平）に移転しましたが、塚本先生を慕う女子中高生が教会学校や青年会にも多く集まり、それらの若者の中から受洗者が与えられたり、オルガニストが育つたりしてきました。自家用車を持たない牧師を乗せて教会訪問を支え、会計役員としても健全な教会運営に腐心されました。

学校勤務の教師としての先生は主に宗教部で活躍され、キリスト教教育の担い手として

先輩、同僚、後輩教師から尊敬と信頼を得、

「数学苦手」の生徒の学力を付けさせる教師としては屈指の実績をあげられました。

「厳しくおつかない先生」と見なされていたのにそれらの生徒たちから慕われてその交流が卒業後も続いているのは「人間への敬意と愛情」を持っておられる先生のお人柄ゆえでしょう。判断力や指導力を十分に発揮されたのは教頭職に就いておられた頃で、当時は校長の片腕として難しい職責をよく果たされました。

学校を退職されて大学（東北学院文学部キリスト教学科）に社会人編入学の枠で入られた時には周囲を驚かせました。定年になられる前でしたから。お若い時から聖書学、神学などを専門的系統的に学びたかったとの願望を実行させたのでした。若い学生たちと机を並べてギリシャ語や歴史神学、組織神学、聖書解釈、説教学や牧会学、キリスト教教育などを学ぶ姿は「まっしぐら」の言葉がぴたりするほど真剣そのもので、当時牧師をのんびりしていた私も神学書を読み返しながら食うような質問にたじたじしました。大学の先生方からは高い評価を受けて卒業され、いよいよ牧会へと赴かれました。

初任地の名取伝道所では、そこを必死に支えておられた数名の役員の方々、また、

伝道所を生んだ仙台長町教会の方々から厚く信頼され、三年後に伝道所から第二種教会へと成し全体的に湿りがちな教区や地区の諸教会に明るい一条の光を与えたことは、御記憶のかたも少なくないでしょう。その間、尚絅学院大学にも非常勤講師として保育学や福祉を学ぶ若い学生たちに、キリスト教を講じ、学生たちには、人気ある講師の一人としてささやかれていたようです。今、宮城学院評議員の任に就かれています。が、評議員会の礼拝を担当され牧師としても信頼されています。

本紙『葡萄の香』の創刊号で塚本先生は珍しく「私の恩師」と小生を呼んで下さり、(3) 常々どちらが年長者か分らないような「力関係」ながらも、牧会経験、人生経験でははるかに長い先輩として遠慮なく塚本先生を評すると心配はいくつもあります。

まず、健康です。見かけは元氣浚刺ですが、大病の後遺症が完全に治癒したとはいえませんが。何事にもマジメを越えて「生真面目」にすべてに対応する傾向が強いので、塚本先生は『恩師』の私にもっと倣い『適当にほどほどに』仕事をしないと命を縮めます。ちゃらんぼらんはいけません、ある程度は手を抜いてください。さらに付け加えると「遊び」をもっと生活の中で大切

にすることです。芸術や文芸にはもともと造詣が深いのですから、もっとそちらにも時間労力を注いで欲しいです。潔癖ですから曲がったことには強く反応しますが、「穏やかに、穏やかに」を心がけてください。先生は感情的な反応はされず、怒る時は必ず非合理的なことが行われたり、本来そうであってはならないことに対して強く指導助言をされるのですが、すべての人がそうした先生の性格を理解できないでしょうし、感情的になっていると誤解される面もありますから。

最後に恩師らしく聖句で締めくくります。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたをまもり、必ずこの土地に連れ帰る。」

(創世記28・15)

## 牧師館便り

皆様お元気ですか。

時の流れは速いもので、もう二ヶ月がたちました。先日、宮城県がんセンターにおいて検査・診察をしましたが、異常ありませんでした。ついでに、知人に預けてある犬と遊んで帰路につきました。楽しく過ごした犬との戯れの一時も過ぎ去り、後ろ髪を

引かれるように仙台を後にバスに乗ったのですが、鶴岡あたりから鳥海山がそびえているのを高速バスの窓から見た時、酒田に神から遣わされている仕事があり、愛する人たちが待っているという神の祝福を感じたのです。神が愛する人々と共に生きる場所があることを改めて感謝しました。酒田での牧会の不安が少し和んだ気がします。

しかし、酒田教会での生活に不安がなくなつたわけではありません。教会員の礼拝出席6名、貧しい教会財政の中で、どのように宣教伝道をしていくのか、五里霧中です。一週間のすべてがふたば園の園長の仕事にエネルギーを消耗して、今までのように牧師としての聖霊に満たされた時が持てなく、魂の渴きを感じた二ヶ月間でした。それは私が今まであまりにも多くの親しい隣人に囲まれてあつたことに改めて気付かされるためであつたのかも。感謝すると同時に、今これからのようにあるべきか分岐点に立つて悩んでいます。生きる場所を変えるのは、年齢と共に柔軟性に欠けて困難であることを改めて感じています。

あるべき教会論に従って生きてきた信仰生活五十年、今ゼロからの出発点に在って一人佇み祈りと黙想をしています。その一方で、世俗の喧騒の中でふりまわされてい

ます。たとえば、今週には、19時から酒田市幼稚園連合父母会総会が開催されるが最後に私が万歳三唱の音頭を取ることになっています。全く価値観が違う世俗と融合して生きていくだけの弾力性があるのか自分でも疑問です。どこかしら方言がわからないだけでなく心がすれ違うのではないかと不安を感じています。

とは言うものの、教会は接木されつつ、永遠に存続するものと私は信じていますので、私が主から遣わされていることを成し遂げたい。私は就任したときからすでに次の牧師の就任を夢見て教会形成に励む決断をしていました。この教会の灯心を消すこと(4)とをしないで、聖霊の働きを信じて、私が出発することはすべて実践したい。自分の力は限られているが、命が与えられ信仰が燃え続けている間、しばしの時を酒田で過ごしたい。どうか、引き続き仙台に帰る日まで、私自身と牧師としての働きのために祈ってください。(塚本恭子)

## 編集後記

私の就任式のために、お便りありがとうございます。6月17日4時から就任式を石井牧師によって挙行されます。(塚本)